

入選

助けられた命

熊本県 戸崎小学校 六年
藤本 実桜

この夏、私にいとこが生まれた。その日は兄の誕生日でもあり、家族でお祝いをしていたときのこと、一本の電話がなった。おじからの電話で、

「赤ちゃん、無事に生まれました。」

という嬉しいニュースだった。私はとても嬉しくて、気持ちが高ぶっていた。

しかし、その一時間後、事態は急変した。おばが、意識不明になり、出血多量で急きょ熊本市内の大きい病院に搬送された。おじからの連絡で、母はあわてふためいて私たちにこう言った。

「おばさんが緊急搬送されたから、病院に行ってくる。命にかかわるからどうなるかわからないけれど、家のことを頼むね。」

そう言って病院に向かった。私は、不安に思いながらも弟や妹の世話をし、時間も遅くなったので、ねかしつけをした。ある程度家事のことが終わると、私も布団に入った。けれど、なかなかねつけずにいた。

すると母からの連絡が来た。

「心配かけてごめん。今、輸血をしているけれど、まだ意識は回復していない。出血箇所の確認中で、そこがわかれば緊急手術に入るから、帰りが遅くなる。」

「わかった。」

私は、不安を胸に抱えながら、ねむりについた。

朝起きると、母は家に帰って来ていた。一発目に、私は母に聞いた。

「どうだった。」

「輸血で、何とか命はつないだよ。ただ、本人の意識は戻ってないけれど、手術はうまくいってバイタルも安定したから、とりあえず帰って来た。」

そう聞いて、私は胸をなでおろした。それをきっかけに、私は輸血について考えさせられた。まずは携帯で、そのことについて調べてみた。輸血は、大量に出血したときや、血液の成分がこわされたときなどに行われることがわかった。

私はこれを通して、ある意味では輸血が命をつなぐ、大切なものだとは再確認した。これまで、テレビやインターネットなどで献血の呼びかけを何度か見たことがあったが、これを機に協力したいと思った。

今回、おばの命は、輸血のおかげで助けられた。手術の2日後、おばは意識を取り戻し、今は赤ちゃんの世話ができるほどまで回復した。私は、おばの命をつないでくれた献血をしてくれた人たちに、とても感謝している。

私はこれまで、相手から何かをしてもらったときに、「ありがとう」と伝えてきたけれど、私が身を持って感じたことは、献血とは思いやりがつまったものだ、ということだ。

そこには「だれかを助けたい」という思いで、献血に協力してくれた人々がいるのだから。